小田原俳句協会報

理事会だより（5・11）

一、令和五年度小田原秋季俳句大会（十月十五日）の実施要項を決定。①兼題「星月夜」「花野」②締切8月4日（金）③投句先：米山翠④選者特選賞：佃名誉会長、新井顧問、池田会長、山田副会長、こよろぎ、草むら。他寿齢者表彰など詳細は本号8頁に。なお市長賞、市議会議長賞、教育長賞を事業部から市へ申請する。

二、桜まつり俳句大会について会計報告（会計部）。

三、秋の吟行会は十一月に大雄山にて計画中（会計部）。

四、審査会運用基準（三月理事会で決定）を全会員に配布。

五、①井上和子さん（草むら）が四月十二日、河本チヨ子さん（沈丁）が五月八日逝去されました。
②笛まつり俳句大会（みなみ俳句協会）は今年度開催見合わせと報告。

「俳句おだわら」10句抄（669号より）

瀬戸　悠　抄出

浮雲へ彩移したる紅椿　山﨑　悦子
船頭の太き二の腕風光る　門松　鳳文
ていねいに磨く手鏡春立てり　伊藤はる子
切り張りの蝶がとびたつ春障子　尾﨑　一夫
湖にきてさざ波となる木の芽風　植松テル子
雨垂れが春よ春よと唄いけり　香川　花子
野を焼けば土に産声あがりさう　髙杉掘三朗
太陽の私信が届くいぬふぐり　木村　和彦
ＡＩの問に答へる日永かな　高橋千代子
農鳥の飛びたつころや水温む　小林永以子

瀧本　敦子　抄出

杜千年どこ曲りても風光る　足立　和子
あたたかや膝ついてきく子の話　二見　和江
春彼岸老いた姉妹はよくしやべる　勝木　澄子
砂時計春分の日の五分間　菅野　英余
きさらぎの更湯に鏡曇りけり　佐宗　欣二
言ひ淀む頼み事あり春の月　加藤　幾代
顔上げて落花の中にゐたりけり　守屋　まち
目覚めよき今朝の庭前沈丁花　村場　十五
白木蓮の月を覚まして蒼みけり　新井たか志
芹を摘む水の濁らぬ話して　田畑ヒロ子

俳句おだわら（5・19〆切り、到着順）

◆小田原鹿火屋（4・28）　久江報

夢掴む拳を解かば陽炎へり　足立　和子
色広ぐ富士真向かひの芝桜　川本　育子
縮緬の端切れに想ひ春の宵　高橋　小糸
せせらぎの音の入り来し葱坊主　山﨑　悦子
四君子の墨の濃淡風光る　近藤　久江

◆山北（4・27）　由里子報

春昼やハングライダーすれ違う　和田恵美子
夫と行く春色の森塩むすび　尾崎　幸子
逃水や忘れたふりで済む話　星　一義
ボンネットに猫の足跡桜まじ　石田加津子
持ち歩く大き封筒竹の秋　竹下由里子

◆香雨・梅ごち（4・23）　忠山報

行く春や納戸に仕舞ふランドセル　肥後ちさこ
踏切を越えて汐の香夏近し　関戸わよこ
蒲公英の絮太陽にひと呼吸　青山　典子
菜の花を右岸左岸に屋形船　門松　鳳文
竹の秋嵯峨野をめぐる一人旅　吉田　百代
桜蕊ふる人気（ひとけ）なき並木道　吉田　康雄
花過ぎの一山どこも静もりて　陌間みどり
ほほを打つ苗代時の山颪　小澤　純子
王朝の色さながらに藤の風　池田　忠山

◆こよろぎ（5・11）　つとむ報

とき忘れ歩くを忘れ花吹雪　髙杉掘三朗
病葉や贅のかぎりの吾をせめ　板谷　雅泉
天守へと坂を照して著莪の花　植松テル子
波しぶき礁（いくり）にはじけ山桜　神山つとむ

◆春野（4・16）　きよ志報

蘖ゆる洞をのり出す田の神さ　秋山　昇
黄砂ふる海に向きたる墓多し　伊藤はる子
石塊に命ふきこむ苔の花　内田知江子
啄木忌引っ繰りかへす砂時計　尾﨑　一夫
沈丁に眠れぬ夜となりにけり　瀬戸　悠
のどけしや道問へばすぐ道連れに　二見　和江
血縁は斯くも薄きや紫木蓮　長谷川きよ志

◆みなみ（4・22）　かほる報

春の宵「母さんお風呂沸きました」　加藤れい子
知らぬ子と貝を見せ合ふ磯遊び　加藤　健治
桜散り頑固な男の樹となりし　市川めぐみ
磯遊び何かが光る汐溜り　豊田　幸枝

辛夷咲く風まだ荒き山路かな　斉藤　静
物語り何か書けそう春の夜　小瀬村信子
夫の居ぬ部屋に一輪牡丹活け　柳川　紀枝
花水木ショートに決める美容院　加藤　富江
子の位置をいつも目で追う磯遊び　加藤かほる

◆青梅（5・10）　幸子報

新茶汲む嫁ぎし吾娘の里帰り　大塚　行人
石楠花の赤色ほろり地のほてる　湯本とし子
花冷えや一組だけの観覧車　加藤まり子
新しき地下足袋一歩春の土　久保寺トミ子
さざえ売り潮の香りも売りにけり　田渕　令子
風光るビタミン色の里の朝　田中　幸子

◆沈丁（5・4）　寶子山報

遠雷や川面に逆さまハイウエイ　若村　京子
真つ白なソックス走る若葉風　柳澤ミサ子
雷雲の奥より出でて迫りけり　田中　惠一
わさび漬け食べたとたんに日雷　河本　純子
夏蝶の生まれた朝のハーブティー　瀧本　敦子
ほどほどが解らぬ生活（くらし）夏に入る　勝木　澄子
雷を惑はぬ妻の笑ひじわ　菅野　英余
雷鳴に走り抜けたり尾瀬ヶ原　髙井　幸子
囀りや応へきれない新造語　片野　節子
日雷形見並べて酒酌まん　峯尾ユキエ
松の木や落雷のあと生なまし　河本チヨ子
ゴリゴリと躍（おど）る揺りこぎ山椒味噌　清水美代子
遠雷のかそけき音に帰路を急く　松下　俊之
チューリップ小さな秘密抱へをり　武居裕美子
雷鳴や猫の隠れる中二階　寶子山京子

◆たけのこ（5・6）　悦女報

甦る遠くあの日の桜貝　三木　泰子
五月晴房総の先の先までも　徳田　公子
左見右見ゆれる七色ランドセル　小宮　早苗
春の月足りし余生になぜ迷ふ　久津間百合子
したたかに生きて酒匂川の野藤かな　宮崎　悦女

◆おほゐ（5・10）　秀泰報

アマリリス巷の声に耳をおく　石井千代子
昭和の日身の内にある青春歌　中村　昌男
母の温み伝えし嬰や風光る　小野　菊土
節くれた指でリズムの茶摘唄　香川　花子
筍を配りし人よ季を配る　二上　光子
吾の中の五感確かめ新茶飲む　廣田　悦子
子は親を親は子を呼び四十雀　石井きよ子

白ばらや俳句作りを遣り過ごし　加藤　春江
縁側で新茶もてなす心地よさ　中津川晴江
新茶飲む語らいつきぬははの事　瀬戸とみ子
茉莉花や朝が大きく動き出す　中根登美子
宇治狭山されど足柄新茶買う　横塚　昌平
葉桜となりて無口の並木かな　高橋みどり
雨蛙大滑空の身の軽さ　風間　秀泰

◆鷹（5・6）　十五報

屋根替や白馬連山見て暮らす　青木　孝子
もり蕎麦の藍のそば猪口夏近し　池田　令子
夕づきて昏れざる島や椎若葉　西賀　久實
清々し酸葉の土手の水溜り　佐宗　欣二
花冷や薄き白磁のティーカップ　須田　晴美
古民家の広縁に汲む新茶かな　中田　笑子
家中のカーテン洗ふ夏隣　百川　秀子
夏近し少女の髪のトンボ玉　山﨑美知子
トーストに付ける焼き絵や四月来る　柏木　良花
手鉢に俎板香る半夏かな　庄司　下載
海老焼売翡翠焼売あたたかし　瀬戸　りん
焼売にチョンと青豆春休　高橋久美子
うぐひすや明の湖面のまさやかに　中山智津子

古き井に水潺潺（せんせん）と蝶の昼　齊藤　桂
昏鐘の島の入江や鳥帰る　芹澤　常子
キャラメルの天使に五月来たりけり　大木　敬子
薫風や落成式の鏡抜き　大島美恵子
絡繰（からくり）の寄木の筥や五月憂し　田下　昌人
おはぐろや川辺に放つ笹小舟　中根　和子
産土の向かひの山や夕桜　加藤　幾代
シャボン玉昔は欲の無かりけり　高橋千代子
泡ひとつ吹いて泥鰌は水底へ　守屋　まち
朝刊の束モンゴルの黄砂かな　米山　翠
澄みきった空と競える野藤かな　來田　新子
アマリリス夫の得意なナポリタン　大沢　年子
土曜日の半ドン勤務昭和の日　片野　秋子
かたばみの花や挫けぬシンデレラ　小林　環
校庭の桜大樹の若葉かな　下平　美子
先師より十歳超えて春の暮　鳥海　壮六
西空に下弦の月や蛍狩　古屋　德男
香水瓶縁なく父は生きにけり　村場　十五

◆実のり（5・18）　たか志報

柿若葉の空を見上げて深呼吸　岩本ひさみ
石垣山の合戦の跡木下闇　杉本　久子

蜜柑咲く江戸へ切り出す小松石　木村　幸枝
山の湯や四方に展(ひら)ける花蜜柑　新井たか志

◆零（5・18）

卒業や素顔を知らぬ友もいて　史郎報
惜春のひとつに遠く貨物船　青木たけを
赤松の白き新芽や気高く美(うま)し　伊藤　道郎
春蘭の森は母体の温みもつ　川合　昌子
はからずも春の形見の大往生　木村　和彦
親しげに鳩啼く響き夏きざす　佐藤　正子
行く春や人ぞ恋しき一人登山　中村　裕子
病める師よ原人として緑林に立て　野川木一路
　　岡本　史郎

◆草むら（5・19）

竿一本太き二の腕鰹船　重満報
鳩時計閻魔大王陽炎えり　石井　秀稀
半熟のままのヒト科や麦の秋　佃　悦夫
　　佐々木重満

◆無所属

河骨の黒子に徹する沈水葉　小林永以子
雉走る担い手のなき田や畑　一ノ瀬茂代
蒲公英の絮に変電所の微音　畠　梅乃
磯遊握り返さる手のありて　出澤　洋子
咬み合はぬ話も笑ひ時計草　木村美千代
稜線につづく稜線夏来たる　須田　聡子
風薫る追はるる日々を生甲斐に　青木　勝子
「出州の浜」初夏の子等風になり　岩楯惠津子
蝸牛戦禍の星にへばりつく　北村　文江
甦る五代北條閧の声　山本　すみ
きよこきよこむぎゅむぎゅとぼく黒鶫　大石　雄介
千手観音腕いそがしい畑　大石　和子
目印は藤咲く家と告げられて　山田　照子
若葉山抜け来し鐘の音青し　田畑ヒロ子
竹の皮脱ぐ二酸化炭素はふはふはす　瀬戸　正洋
百でなく三百名山亀鳴けり　山口　千代
桜吹雪時間が散ってく物憂げに　穂坂志げる
藤咲くや背にごつりと床柱　杉崎　せつ
樟の木のゆさりゆさりと風薫る　蓑宮　わか
エイプリルフール脳神経の迷走　杉山あけみ
フーフーと妹に教えるしゃぼん玉　岡田　典代
水馬いちかばちかで潜りたし　小澤　園子
蝌蚪生れ瞼に浮かぶ母をらず　小島ノブヨシ
緑雨きて介護に仏鬼も棲む　大佐田うづき

空高く／井上和子遺句抄（佐々木重満抄出）

空高く飛ぶ風船として生れる
角砂糖ゆるくとけて日脚伸ぶ
春の川息弾ませて本流へ
夏みかん追憶という皮をむく
ちみもうりょう鎮めて森に春満月
実習の青年教師濃あじさい
うららかや見えて聞こえる祖母の座に
み仏の長き指先奈良新春
梅香りリビングにある椅子いろいろ
読む程に歴女濃くなる夜長かな
インターの大駐車場天の川
燕発つピアノレッスン身につけて

感謝される人

佐々木重満

井上さんは「雫の会」で面倒な会計をずっと担当されていました。気配り上手で皆様から大変信頼されていました。趣味もお茶、お花、陶芸、編物、端切れで小物入の制作などとても多彩な方でした。お造りなさった作品は惜しげもなく皆様に贈っていました。

茶筅置く指の白さや菜種梅雨
百舌鳥啼くや絵皿にとかす赤のいろ

句会へ行く車内で、学徒勤労動員での帝国大学生との青春譜。御父上が太平洋戦争の激戦地サイパン島で戦死されたことなど色々とお話を伺いました。

白藤の回廊姫の如くゆく
玉砕せし父の旧仮名半夏生

ご家族にも恵まれ、ご息女は音楽の先生。お孫さんは教師と東京藝大の大学院を首席で卒業しワールドワイドにオペラ歌手として活躍中のお二人。また、国内外の旅行にはいつもご家族と一緒に出かけていました。

彼女の口癖は「家族に大事にされ幸せ、感謝しています」でした。享年九十二歳　合掌

新作５句

昇

揚雲雀声天上に舞ひ降りぬ
春暁の夢に仏も邪鬼も来て
巡礼の鈴の音のせて花筏
しゃぼん玉あの世この世を映しをり
蝶二つもつれもつれて耀へり

秋山　澄子

桐の花背中（せな）に手を添ふ過疎の村
元気がる事も肝腎新茶飲む
草いきれ一時間待つ御殿場線
五月闇人・街老ひて空のバス
こいのぼり怒の風を戦向け

勝木　トミ子

春の庭雀五六羽会議かな
春の土ふわりと鍬に砕けけり
菜の花の一群映える休耕田
春の畦鴉緩る緩る渡りけり
これからもずっと農婦や山笑う

久保寺　久子

山笑ふ犬も笑ふと言ふ子かな
リラ冷えや未だに進まざる和平
麦の秋刈り取る人もなき戦地
薫風や憲法九条常しへに
廃校の裏山今も花みかん

江川　晴

老二人背中丸めて日向ぼこ
あれこれと言っては笑い新茶飲む
新茶の四拍子は和の心
夏座敷テレビの音量大きくす
時代かな滅多に見れぬ鯉のぼり

津中　翠

夏めくや休耕田の醜草
雨上がる堰の水泡や蟇のこゑ
蚯蚓ひく矮鶏の嘴今朝の畑
短夜や人待ちゐたる湖畔宿
吾の頬を寝ぼけ眼に蚊を叩く

米山

老二人背中丸めて日向ぼこ
あれこれと言っては笑い新茶飲む
新茶の四拍子は和の心
夏座敷テレビの音量大きくす
時代かな滅多に見れぬ鯉のぼり

俳句おだわら鑑賞

石井きよ子

（令和５年３月号）

わんぱくの口一文字筆はじめ　　関戸わよこ

書き初めの景でしょう。書き初めをしているのは「わんぱく」坊や。普段はじっとしているのは苦手。でも、その彼がここ一番、書き初め用紙に必死に立ち向かっています。真剣そのもの。中七の「口一文字」の措辞からその懸命さが読み手に真っ直ぐに伝わってきます。わんぱくな子だけれどやるときはやるのです。作者の「わんぱく」坊やを見る眼差しの優しさが心にしみました。

令和5年度小田原秋季俳句大会

第一部　作品募集

兼　題　「星月夜」「花野」（いずれも傍題可）各一句
　　一組　未発表作品に限る。
締　切　令和五年八月四日（金）必着
整理費　一組に付き千円（句稿に同封、何組でも可）
投句先　〒250-0851 小田原市曽比二四三二
　　米山　翠宛（☎〇四六五ー三六ー四五九〇）
＊作品は投句原稿どおり印刷しますので、楷書で、大文字、小文字をはっきりとお書き下さい。
＊第二部への参加・不参加もご記入下さい。
選　者　協会役員及び各地有力作家
賞　　小田原市長賞以下二十位、選者特選賞

第二部　俳句大会

日　時　令和五年十月十五日（日）
会　場　おだわら市民交流センター（通称ＵＭＥＣＯ）
受　付　十一時　投句締切十二時
　　開会十二時半　終了十五時半（予定）
整理費　五百円（呈飲み物）
当日題　秋季雑詠二句　総互選
賞　　小田原俳句協会長賞以下五十位
＊お願い　会場では飲食可能です。
参加人数が多数見込まれますので、感染防止対策にご協力下さい。
★当協会員で令和四年十月三日（令和４年度秋季俳句大会翌日）から五年十月十五日（秋季大会当日）に満年齢で還暦、古希、喜寿、傘寿、米寿、卒寿に達する寿齢者への恒例の表彰を行いますので該当者は奮ってご投句下さい。（表彰は投句条件）
〈主催〉小田原俳句協会　〈後援〉各地俳句協会

俳句おだわら鑑賞

大島美恵子　（令和5年3月号）

春夕焼改札を出て主婦の顔　小林　環

主婦の気持ちが句になった事、脱帽です。季語が良い。改札でのリセット等場面設定も言う事無し。一日を楽しく遊んだか、学校行事等の帰りか想像がふくらむ。

私は今だにバスを降りて現実に戻るくらしだが、作者も身に付いた習性かと改めて思った。

理事会日程　6／8　7／13　8／10
（毎月第二木曜日　けやき 十五時開催）

小田原俳句協会　〒二五〇ー〇〇一二　小田原市本町二ー一三ー二　池田　忠山方